

多方向へのシーケンス

連続性と予測外を引き起こす

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB3210 倉地 俊明

1. 予測外の階段体験

都市で感じた階段体験 (fig.1) では上下空間の連続性を感じたにも関わらず予測外の体験をした。空間同士に連続性をどうしたら起こせるのだろうか (fig.2)。



fig.1 断面的連続性の切り替わりと予測外 fig.2 階段体験ダイアグラム

2. 空間同士の連続性

階段体験での連続性は何かを分析した。空間同士の連続性には視線の制限を作る事が必要であり (fig.3)、「全て見える」、「全く見えない」でなく、周囲の状況から何となく連続している。空間の間に視線を遮るものや、空間の配置操作によって死角をつくる事が、先の空間の気配を感じさせる (fig.4.5)。



fig.3 視線の制限を与える門と境内空間との連続性



fig.4 視線の制限の少ない軸線的な路地の認識の変化



fig.5 階段が上の空間に死角をつくり気配を作り出している

3. 多方向への連続性

「ヒルサイドテラス / 槇文彦」の内部空間 (fig.6) は、多方向に空間の連続性が存在し、視線の制限が起きている (fig.7)。レベル差を操作した断面的な空間は、平面だけでなく上下の視線の制限と抜けを作る事で多方向にシーケンスを感じる。現在、予測外の空間体験を起こすには断面的な空間構成が最適と考える。



fig.6 断面的な多方向への連続性

fig.7 全てを見せない視線の制限

4. 切り替わり-シーケンスから予測外

シーケンスを起こすため、分析から3つの空間を組み、モデルを制作 (fig.8.9)。視線の制限を操作し、主体が視覚的に制限された空間から気配を感じ、制限を越えた空間に移る時に気配では認識できなかった予測外に切り替わる。

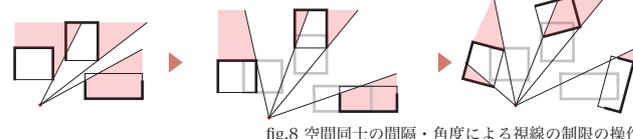


fig.8 空間同士の間隔・角度による視線の制限の操作



fig.9 平面的から断面的な視線の制限&切り替えモデルスタディ

5. 多方向へシーケンスをつくる

シーケンスモデルの関係を住宅に提案する。空間同士の距離やレベル差で視線の制限を作る。空間同士に気配を感じさせる事で、遮られた空間は主体の移動により予測外な空間に切り替わり、そこでまた別の空間への気配を感じる。明確な境界を持たずに連続する気配を感じ取り合う、多様な活動が認識できる空間となる (fig.10-13)。

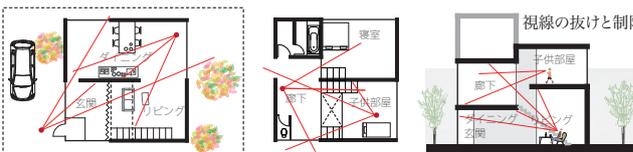


fig.10 1F Plan

fig.11 2F Plan

fig.12 Section Plan



fig.13 気配を感じ取る視線の制限と抜け